

シンポジウム

東アジア 4 国際都市における環境社会再生への方法の探求

— 水原・台北・ハルбин・横浜の脆弱街区を事例として —

中井 邦夫

2014年8月3日(日)、表題のシンポジウムが、横浜キャンパス3号館305講義室にて開催された。本シンポジウムには、これら各都市に所在する成均館大学校、国立台湾科技大学、哈爾濱工業大学、そして本学の各教員と約40名の大学院生が参加し、加えて基調講演講師として米国シアトルで活躍されている建築家のRoger Williams氏が招かれた。内容は、各都市における脆弱街区再生の事例紹介とパネルディスカッションとの2部構成であり、それらを比較、検討することを通して、東アジアの都市における環境社会再生への方法におけるその問題点や可能性について考える貴重な機会となった。

山家実行委員長からの主旨説明の後、Roger Williams氏から、シアトルにおける都市開発と建築物保存活用、とくに PIKE PUBLIC MARKET 地区(図)の再生計画についての説明があった。20世紀初頭に生まれた同マーケットは、1970年頃に移転と大規模再開発の計画が持ち上がったものの、市民の反対運動によって保存再生へと転換され、以来現在に至るまでの約40年間に渡って、市民参加による息の長い保存活用計画が進められている。現在ではシアトルの歴史的な資産であるとともに観光名所として定着している。

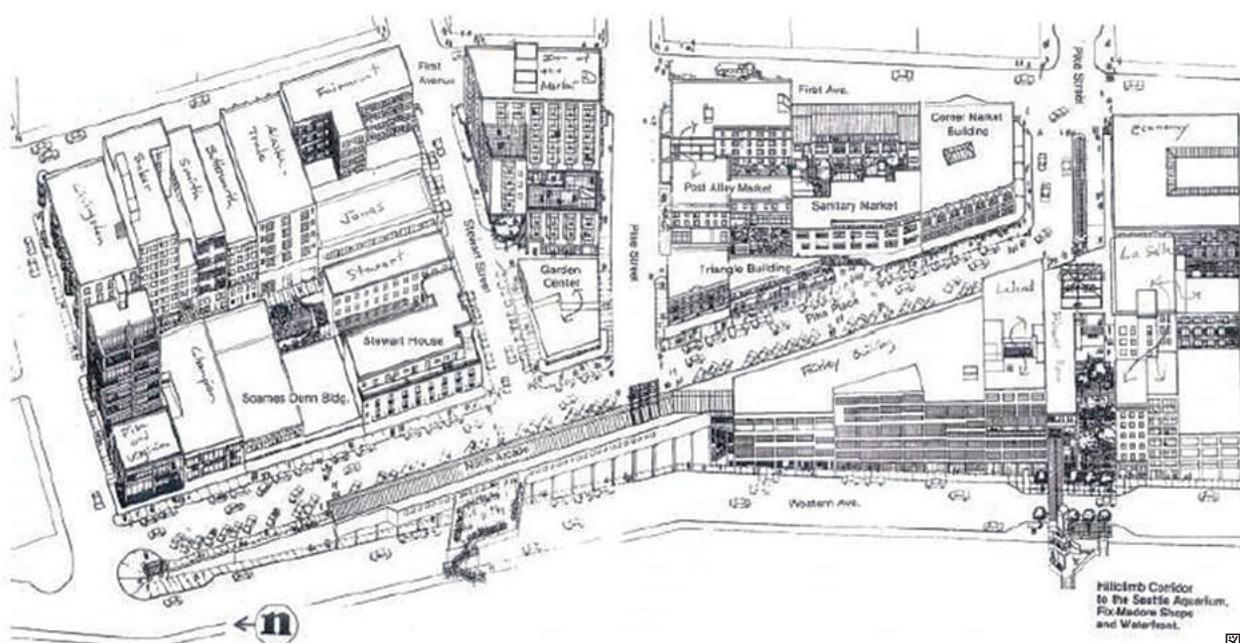
成均館大学校の Kwon Moonsung 先生からは、2009~10年にかけて自身が手掛けたソウルの西村での保存再生事例について説明があった(写真1)。西村



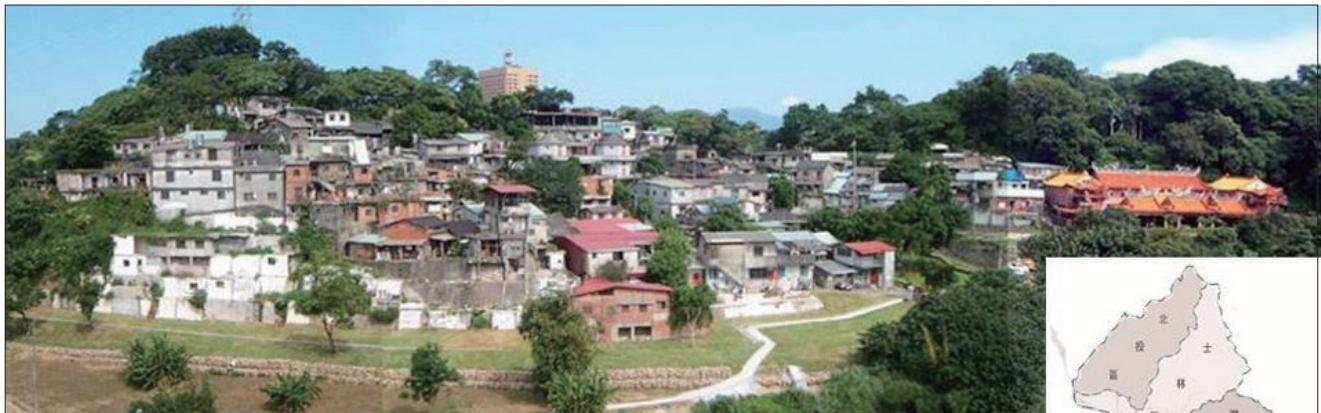
写真 1

は景福宮の西側に位置する下町であり、現在でも昔ながらの韓屋(Hanok)が多く残っている。行政、開発業者などとの複雑な関係のなかで、単なる保存ではなく、住民が参加して現在でも持続する魅力的なまちづくりが実践されている。

国立台湾科技大学の Chuang I-Ting 先生からは、古いビール工場を文化センターに改修した華山1914や、伝統的な町家を教育の場として保存再生した剥皮寮(Bo-Pi-Liao)、スラム化していた日本統治時代の住宅地を芸術家村として再生した宝藏巖(Treasure Hill)(写真2)、古い建築物を市民参加のもとに再生、運営を進めるプラットフォームである「都市再生前進基地(Urban Regeneration Station)」の試みなど、台北におけるいく



図



Treasure Hill is a historical settlement of late Japanese Occupancy in Taiwan.

Treasure Hill was demarcated as protected area and safeguarded by military due to its location on Hsintien river, which is one of the major resources for running water supply in Taipei



写真 2

つかの興味深い事例が紹介された。

哈爾濱工業大學の Han Yanjun 先生からは、19世紀末以降、ロシアによる東清鉄道建設とともに急速に発展した哈爾濱のユニークな歴史を辿りつつ、そうした歴史が、伝統的なロシア風建築、アルヌーボー、チャイニーズ・バロックと呼ばれる中国式洋風建築（写真3）といった特徴的な歴史的な建築物として街並みに残され、活用されていることが紹介された。

神奈川大学の曾我部教授からは、横浜の歴史の紹介に続き、娼婦街として知られた横浜の黄金町を、芸術活動を通して再生するための拠点となるアーティスト・スタジオ建設とその運営における実践が紹介された（写真4）。

続く第二部ディスカッションでは、上記メンバーに加えて重村教授が司会として加わり、活発な議論が展開された。今回紹介された各都市の脆弱街区は、それぞれ固有のコンテクストと、都市経済のグローバル化との間で見捨てられたり、取り残されてきたエリアといえる。各

再生事例は、これらのエリアに埋もれている歴史的、文化的、社会的な価値を掘り起したり、活動の拠り所を挿入することによって、地域に根差した持続的な再生を目指されている点で共通している。議論のなかでは、再生活動の主導権を開発業者や行政ではなく市民側が握ることの難しさや、行政の補助金などに頼らない自立力と持続力の重要性などが指摘された。また同時に、各都市の郊外に共通して見られるような、活かすべき歴史的、文化的な文脈が希薄な巨大開発エリアが、将来新たな脆弱街区になることへの危惧も指摘された。こうした巨大資本に基づく均質な開発が進めば進むほど、それぞれのまちに固有の歴史的、文化的なコンテクストに目を向け、活かしていくことが、魅力的な環境社会再生に欠かせないこと、そして東アジアの各都市には、現在でもそうした貴重なコンテクストが静かに、しかし力強く息づいていることが再認識された。

（工学部准教授）



写真 3



写真 4